

## 橘 惠 勝 氏 に 答 ぶ

本 田 義 英

一一二

「佛教心理の研究」著者橘惠勝氏足下、未だ拜眉の榮を得ぬ前に足下の著述に試みた私の批評が足下の感情を害した事は誠に遺憾に堪えぬ、さて言ふまでもなく苟も身學界に屬する私共の議論には出來得る限り感情に流るゝといふ事を憤しまねばならぬ、若し不幸にして冷靜なる理性の判断を顧みないとするれば勢ひ無益な水掛論に終らざるを得ないのである、今責任上この態度から離れない様に私の批評に對する足下の反駁に就て簡單に答解を試みよう、便宜上態度から説く事にする。

## (A) 態度に就て

一、足下自身としては駁文中に序本並べ證せる處から見るとその間何等の矛盾を認めて居らぬ様である、然し私は足下の態度に聊か疑を懐くのである、その序文に述べられた處と本文のそれとの間に矛盾がありはしないか、棒大なる序文は本文や駁文に於ては針小なる「少きき試み」に變つて居るではないか、「現代的」といふ様な言葉の主眼を足下は内容の如何なる點に於て示して居るか、五十九頁五事毘婆論引文、原引書に「種植生長」とあるを「自然の風景をそのままに損せざる様に保存して後進の人に多趣なるながめを辿らしむるといふ親切」で「並々ならぬ用意」の上から何等の斷りなく「種種に生長して」と「咀嚼」し進へた様なのが

現代的なのであるか、或は引文と引文とをつなぐ足下自身の心理的説明註釋、例へば「情調の加りたる異熟生と、内容の擴充せられたる長養とは、復生の事實にして、中性の受にて再現したる觀念は、等流の事實なり(百五十七頁)、の如きが果して現代的なのであるうか、これ等は單に一例に過ぎぬ、若し足下が序本併存を固守するならば序文は羊頭にして本文や目的は狗肉の策を運らしたのだと言はれても止むを得ぬ、これ學者の態度として私の借しむ處である。

二、又苟も「佛教心理の研究」といふ様な世間的な書名を附した以上は佛教學と世間學とを交渉せしむる俦たらしむるに努力せねばならぬ筈である、又それが現在及將來に於ける佛教學者當然の責務ではあるまいか、佛教心理上の語義の如き足下自身としては元より咀嚼せられては居るだらうがその發表の形式に於てその咀嚼の跡を世間的に徹底させた處が何處にあるか、佛教書にもあらず又世間書にもあらず又中庸も得ず所謂どつちもつかずの濶到る處に存するではないか、假りに一步を譲つて若し本書が單に足下の様な佛教專門學者相手のものであるとすれば尠くとも世間の學者を迷はず様な書名と序文とは學者として改めて欲しい、元より足下努力の跡は顯然として居てそれには尠からぬ敬意を拂つては居

るが然し私が「佛教心理上の語義の如き少しも咀嚼の跡なく」「眞面目な意味では決して佛教心理の研究といへないのである」と批評したのも意致にあるのである。

三、凡そ天下萬の所作皆その態度の不動に依りて安全の状態を得る、最初私は序文の態度を著者の態度として本書を讀んだ、然るに本文には序文の態度が少しも見へぬ、私は迷ふた、然し凡そ己が所思を發表するに當りては先づその基礎的態度を序文に於て宣明すべきは古今東西の通則である、たとへ本文中にその態度を補ふ事ありとするも序文と矛盾する事を許さないものである、で依然私は序文を正しき態度と見なして本書を精讀した、前批評の全體はその結果である、足下が私の批評に對して不服であるといふのは恐らくその態度の如何に基くのであらう、隨時隨處屢々態度の變改を行つて事に従ひ或は單に書名や序文のみに依り或は感情的に無責任な批評紹介をするといふ様な事があるのは學界のため誠に憂慮すべき現象であるといふ様な事が居るのである、私は内容よりも態度の方が先づ第一に學究上大切であらうと思ふ、故に若し内容は兎に角尠くとも本書の書名が改められその序文も如實如法のものとして足下の態度が一定したならば私の批評も亦幾分改められるであらう。

(B) 内容に就て

茲に内容といふも廣義の内容即ちその組織とか文脈とかに就て主として述べる事にする、この問題に關して足下は私の批評を「聞き捨てにならぬ」と仰せになつて居るから禮義上代表的に一二の例でその答解を試みる事にする、若し一々之を詳細に指摘するに

於ては本誌餘白の到底盡し得る處でないのであるから。

一、足下は「古典をして語らしめんがために一系の組織に苦心」せられたとの事であるからその引文前後の關係なんかも仔細に之を考へられた事だと思ふ、然るに十六頁隨相論の引文「前言には……」は何處にその前言があるか、又二十八頁我を説ける條下「經驗」に説き及び「この經驗的實有を佛教にては有爲法といふなり」として居る、而して若し文脈の組織關係の上から之を見れば當然この次には順正論の「諸の有爲法は色等の五蘊……」若くは成實論の「有爲法とは衆縁より生じたる……」の文が續かねばならぬ處である、然るにその處に足下は隨相論の「三有爲に自ら二種あり……」の文、尙續きて同論の「生あり滅あるが故に無常と名く……」の文を引て居る、勿論この章は主として私の説明であるから全く不當だとは言はないが若しその「研究法を嚴正ならしめたならばこの隨相論の引文は本章最後の引文として欲しかつたのである、殊に又その隨相論の後の引文の如きはこの處では三行或は四行にて足つて居る、後の一頁餘に亘る引文は殆ど是でこの前後に於ては「殆ど無關係な」ものではあるまいか、又五十三頁成實論の引文「色法とは……」及び「心と意と識とは……」、及び五十四頁阿毘曇心論「心とは意なり……」の引文も殆どこの處に關係なく之は寧ろ第五章心意識論中に攝せらるべきものであるまいか、その他この種の不秩序不用意のもの實に決して尠しとせず全卷不首尾の一因を形成して居る、そして尙又かの「五取蘊」の如き元より足下苦心の結果でもあらうが應々最後に一章を設くるの必要果してあるか、これは引文の連接に注意し三十六頁五蘊論中に攝して論じ

られたならば雙方に於て首尾の上に大なる好結果を表はしたであろうと思はれる、抑も「現代的なる體系に整理」された形跡果して何處にあるか。

二、以上は文脈組織上からの事であるから見方に依ては何とでも言ひ廻して責任を免れる事も出来なないでもない、然し「聞き捨て」ではなくて見逃しのならぬ事がある、一例だけを擧げて具體的に述べよう、先づ百三十九頁順正理論の引文(略す)を「眞面目に更に

張目して一讀して」貰ひ度い、之は何を確證せんとする引文であるか、引文の意味する處何であるか、古典の文句はこれまでに不完全なものであるうか、兎に角このまゝでは意味不通である、足下は如何なる種類の學識、如何なる「學力の程度」に依て如何にこれ等の引文を讀破し理解し「現代的に佛教の權威ある事を古典的事實に依て確證」せんとするのであるか、私にはわからぬ、足下は「わが計畫が空しくなつたかどうかそれら讀者の學力の程度問題であるから著者の責任ではないから如何でもよい」と無責任極まる事を言て居られるのであるから強てとは言はぬが若し「後の研究者の手引」となり「たとひ血が出る事がありても學界の爲めであるから自ら犠牲となる事を意とせない」といふのが足下の眞面目な告白であるとすればこの私の疑に就て特に後進のために御答へになるのが先進當然の責務であらねばならぬ。

そして元より本書は「亡き父母の報恩のために捧」げられた「眞面目な佛教心理の研究」であるから不自然なる「誤脱等の不」用意は「親切」な足下の事であるから毛頭ない事は道義上から見てもそうあり度いと思ふ、正誤表すらないのを見ると益々この感が深う

なる事は特に申添へて置きます。

### (C) 致命的缺點

足下から「致命的缺點」を具體的に指摘せよといふ恐ろしい命令があつたが若し有體にいふ事が許さるゝならばそれは足下の態度の上にあらうと思ふ、そして足下が若しその態度を改めず固守せらるゝ以上はその缺點は上述内容の上にも及ぶものである事を附け加へて置く。

私の批評が正當であるか否かは元より讀者の理性の程度問題で定まるのではあるが、それが果して「酷評」であるか、「放言」であるか、或は又不眞面目なあらさがしであるか、眞面目に今一應理性に訴へて御熟考が願ひ度い、これ以上答ふる必要を私は認めぬ。「私に説述することならば作業は易々たる」博學なる足下の著述を足下自身の感情や一切の東縛阿諛に拘泥せず公平に批評し去つたのが或は不敬に當つたのかも知れない、文中禮を失するの言辭、僭越の罪深く謝して置きます。

終りに學會のために足下の健康を祈る。(大正五年六月五日)